

【目的】 鎌倉時代に、法然、親鸞などのついで、前時代に日本仏教として発展を遂げた貴族仏教を民衆のもとにかえそうとし、独自に浄土信仰の布教につとめた一遍上人は、時宗の開祖として輝かしい業績を残し、諸國遍歴による踊念仏などの集団的行動をとむなう民族宗教ともいふべき独得の宗教を發展させた。「其能の祖」ではなにかと仏教學界において注目されているこの時宗の法衣の中でも今回は「綱衣」について考察したいと考へ、まず時宗の成立の歴史や「綱衣」の構成及び縫製についての調査、さらに同時期における他宗派の法衣との比較、関連を追求した。

【方法】 京都市内の寺(禅宗長福寺、浄土真宗西本願寺、時宗叡誓光寺)、京都国立博物館、四天王寺国際仏教大學図書館、京都府立資料館における遺品の実態調査、文献調査を行った。

【結果】 「綱衣」は別名かさね法衣、阿弥陀ともよばれる。衿の上では他宗派より法衣とも思われにくい特異な法衣で、通常衣と裳が共存するもので両子の比心、裳がついておらず、身丈も短かく、材質も他宗派と異なるものを使用しており、縫製方法でも従来の返し縫いの技法は全くつかわず、「つま合せ縫い」と、「かかり縫い」が主で、一部のみ「刺し縫い」が用いられている。これらから、法衣というものの肌、屋内もしくは屋外の相違によっても宗教の布教の影響を互合に受けられているものとも考えられる。